

DAFTAR ISI

KATA PENGANTAR.....	i
DAFTAR ISI.....	iii
BAB I Pendahuluan.....	1
I.1 Latar Belakang Masalah.....	1
I.2 Rumusan Masalah.....	6
I.3 Tujuan Penelitian.....	7
I.4 Metode Penelitian dan Teknik Kajian.....	7
I.5 Organisasi penulisan.....	8
BAB II Kajian Teori.....	9
2.1 Sintaksis.....	9
2.2 Semantik.....	12
2.3 <i>Joshi</i>	18
2.3.1 <i>Kakujoshi</i> で.....	21
2.3.2 <i>Kakujoshi</i> に.....	24
BAB III Analisis Partikel Lokatif で dan に Dalam Klimat Bahasa Jepang	27
3.1 <i>Joshi</i> で.....	28
3.1.1 <i>Joshi</i> で yang menunjukkan tempat melakukan suatu tindakan.	28
3.1.2 <i>Joshi</i> で yang menunjukkan keberadaan sesuatu.....	36

3.2	<i>Joshi</i> に	38
3.2.1	<i>Joshi</i> に yang menunjukkan tempat melakukan suatu tindakan.	38
3.2.2	<i>Joshi</i> に yang menunjukkan keberadaan sesuatu.....	49
BAB IV Kesimpulan.....		61
SINOPSIS.....		62
LAMPIRAN DATA		
LAMPIRAN KORPUS		
DAFTAR PUSTAKA		
Daftar Sumber Data dan Singkatan		
Riwayat Hidup Penulis		

日本語の文における場所を示す助詞「で」および「に」の分析

(統語論および意味論からの考察)

ノグ イリア

0342058

マラナタキリスト教大学

文学語日本文学科

バンドン

2008

梗概

1. 前書き

日本語の文法の中に品詞分類がある、例は：名詞、動詞、副詞、連体詞、形容動詞、形容詞、接続詞、感動詞、助動詞 と 助詞。富田 (1991:68)は助詞を次のように定義している：

“単語で使われることはなく、主として自立語に付いて、補助的な意味を付け変えたり、その自立語とほかの自立語の関係を示したりする単語を「助詞」と言います。”

益岡 (1999:49)は助詞を；格助詞、接続助詞、提題助詞、取立て助詞 と終助詞に分けている。助詞「で」と助詞「に」は格助詞に入るものである。益岡 (1999)は格助詞を次のように定義している：

“補足語が述語に対してどのような関係にあるかを表す助詞を、「格助詞」という。”

富田 (1993:90)は助詞「で」を次のように定義している：

“場所. 空間を示す体言に付いて、動作、行動が行われる場所. 空間を示しある範囲を示します。”

富田 (1993:79) は助詞「に」を次のように定義している：

“存在の場所、空間（ある、いる所）を表し、述語の表す動作・行動によって、主語や対象になっているものが着く/付くところ、すなわち目的地とか帰着点とか到達点とか言われる場所・ところをあらわします。”

2 . 本論

次は助詞「で」および「に」のついた例文とその分析である：

1 . あたしえきで40分も待ったんだからね！！(Dkdk:1997:8)

1) の文の主語はあたしであるが、会話文になっているので、助詞

「は」は省略されている。主語「あたし」は[待つ]という動作を行

っているので、この動作を行われた場所を示す助詞は「で」になっ

ているのである。

2 . 彼は部屋の隅でじっと立っていた。(KKJS;2000:54)

2) の文の述語は「立つ」という動詞であるが、場所を示す助詞は

「で」でも「に」でも使えるのである。助詞「で」を使う場合、主語の

動作の場所「部屋の隅」を示すが、助詞「に」を使う場合、存在を示す

のである。

3 . 新宿のシティホテルに勤めている恵理とは二年前。(Masui:1993:7)

3) の文の述語は勤めるという動詞である主語は動作を行うので、助詞「に」を使うのである。

なぜならば、「勤める」という動詞は職業柄という意味を表し、労働という意味を表すのではなす。

3 . 結論

助詞「で」および「に」の用法を分析してみた結果、助詞「で」と「に」は主語の動作が瞬間動詞の場合置き換えが可能である。助詞「で」は主語が何かの動詞を行う場合に使うが「に」は主語が動作を行われる場合に使う。静動詞と瞬間動詞を使った文に助詞「に」が出てくるのである。